

平成21年4月28日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2006～2009  
 課題番号：18520403  
 研究課題名（和文） 大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための  
 統合・協働的カリキュラム  
 研究課題名（英文） Curriculum Development for Japanese Language Learning in the  
 University: Integrative and Collaborative Approach  
 研究代表者  
 大島弥生（OSHIMA YAYOI）  
 東京海洋大学・海洋科学部・准教授  
 研究者番号：90293092

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：(1)日本語表現能力(2)アカデミック・ジャパニーズ (3)ピア・レスポンス  
 (4)協働的アプローチ (5)初年次教育 (6)ワークショップ  
 (7)カリキュラム (8)アカデミック・ライティング

## 1. 研究計画の概要

本研究は、大学教育への社会的要請に応える日本語表現能力育成のための、統合的かつ協働的アプローチを重視したカリキュラムの開発を目的とする。大学教育の諸分野での実践を対象に、授業の内容・方法・シラバス・教材・効果の分析を行い、カリキュラムのモデルとして提示することを目指す。カリキュラムは留学生および日本人大学生の双方に資する、汎用性と実現可能性の高いモデルとして構築する。さらに、成果を、ワークショップ等を通じて公開し、広い範囲でアクセスが可能となるようにする。

## 2. 研究の進捗状況

研究代表者・分担者・協力者が所属するそれぞれの機関において、授業活動の音声データや手書きデータを採取し、文字化して分析を行った。また、日本人大学生と留学生との授業を介した交流のカリキュラム化を通じ、そこに見られる相互行為のデータ化、分析を進めた。主な成果として、

- (1)大学初年次の言語表現能力育成デザイン  
の検討（医学部、海洋科学部等）
- (2)協働的アプローチによる作文授業・討論場  
面、活動の成果物の分析、初級日本語学習  
者への適用の検討
- (3)日本人学生と留学生との協働学習の成果  
の分析とカリキュラムの検討
- (4)統合・協働アプローチによる様々な授業活  
動の提案（レジュメ作成、スピーチ作成、  
ブックトーク、ポスター発表、携帯電話を

利用した理解の共有等）

等の分析を進め、各種の雑誌・大会等で発表した。また、研究グループの長期の成果をまとめる作業を同時に行い、大島弥生ほか編『大学の授業をデザインするー日本語表現能力を育くむ授業のアイデア』として平成21年度に刊行を予定している。

同時に、統合・協働アプローチの手法に対する広範な理解を促進するため、他分野の専門家を招いての科研費プロジェクト「統合・協働的カリキュラム」公開研究会を2回開催し、各回75～80名の参加を得た。

## ①第1回公開研究会（2008.2.11）：

「協働的アプローチによる日本語表現能力育成授業と活動理論」

## ②第2回公開研究会（2009.2.8）：

「日本語表現能力育成授業における協働的意味構築の試み」

公開研究会では他分野の専門家の講演に加え、統合・協働アプローチの実践のデザイン、成果について報告し、同時に教師・研究者対象のワークショップを行って意見を交換した。

## 3. 現在までの達成度

## ①当初の計画以上に進展している

理由：

各機関におけるデータ収集とその分析が進み、次ページに述べるような多くの成果発表につながっている。ことに、留学生と日本人学生の双方に適したカリキュラムを考え

るのみならず、両者が同じ授業場面で協働的に問題解決にあたる中での相互行為の分析が予定以上に進んでいるといえる。

また、毎年のワークショップ公開研究会にも多数の参加者があり、統合・協働アプローチによる日本語表現能力育成の授業実践およびカリキュラム構築についての情報発信と意見交換も進んでいる。当初の予定では、ワークショップのほかにホームページを開設しての情報発信も計画にあったが、今後、科研費研究成果については国立情報語学研究所のホームページに公開することが義務付けられたため、あえて個別ホームページのための費用は使わずに成果発表とデータ収集・分析に回すこととした。このような一連の蓄積から、①と評価した。

#### 4. 今後の研究の推進方策

最終年度においては、個別の研究成果を日本語教育学会国際大会や大学教育学会等で発表するほか、協働的なアプローチによる多文化クラスの学びについての総合的な成果発表など、今までの分析を総合する形での発信を計画している。また、ワークショップ型の研究会によるカリキュラム構築の手法発信も昨年までと同様に計画している。

#### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

茂住和世, 外国人留学生の考える, 日本人の「誘い」と「断り」ーコンテキスト依存度を意識して作成した会話文からー, 日本語教育学会秋季大会予稿集, 査読有, 2008, 134-139.

小笠恵美子, 留学生と日本人学生によるスピーチ作成にむけた会話の分析, 言語文化と日本語教育, 査読有, 36, 2008, 45-47.

大島弥生, 語の選択支援の場としてのピア・レスポンスの可能性を考える, 日本語教育, 査読有, 140, 15-25.

大島弥生, 大学初年次のレポート作成授業におけるライティングのプロセス, 言語文化と日本語教育, 査読有, 33, 57-64.

大島弥生, レポートのアウトライン点検時のピア・レスポンスにみる情報の交渉, 日本語教育学会 2007 年度秋季大会予稿集, 査読有, 2007, 109-112.

[学会発表] (計 12 件)

茂住和世, 評価を意識したグループディスカッションの試みー学びを実践に生かす取り組みとしてー, 大学教育学会大会, 2008. 6. 8, 東京, 目白大学

影山陽子, 大学における協働学習の可能性ー気づきを促すツールとしての携帯電話の活用ー日本協同教育学会, 2008. 6. 7, 名古屋, 中京大学

池田玲子, 自律的学習環境づくりのための日本語コミュニケーションの学習ー初年次総合日本語クラスのデザイン, 日本語教育学会世界大会, 2008. 7. 12, 韓国, 釜山外国語大学

三原祥子・松本茂, 医学部初年次教育における文章表現教育の改革の試み, 第 15 回大学教育研究フォーラム, 2009. 3. 21, 京都, 京都大学

大島弥生, ジグソー型ブックトークを通じた日本社会に関する知識の構築, 日本言語文化学会研究会, 2008. 11. 29, 東京, お茶の水女子大学

[図書] (計 3 件)

池田玲子 「協働学習としての対話的問題提起学習」『ことばの教育を实践する・探求する・活動型日本語教育の広がり』, 2008, 凡人社, 62-81

池田玲子 「批判的・論理的思考力とコミュニケーション力育成のための日本語表現法 日本語作文ピア・レスポンスの応用」 国立国語研究所編『日本語教育年鑑 2007 年度版』, 2008, くろしお出版, 32-47

大島弥生, 「大学初年次日本語表現科目でのアカデミック・ライティングのコースの設計」, 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』, 2006, 115-127

[その他]

公開研究会 計 2 回開催